時事新報

時事新報は一年三百六十五日一日も休刊無し

第二千四百三十五號　明治廿二年十月七日　月曜日
舊暦巳丑九月十三日（丙辰）
日出午前五時四十二分　日入午後五時十六分　月出午後四時四十分　月入午前三時十八分　滿潮午前三時四十四分　午後四時十二分
（西暦一千八百八十九年）

時事新報定價

時事新報ハ一年三百六十五日一日モ休刊セズ其代價遞送料廣告料ハ左ノ如シ

一枚二錢〇一箇月前金五十錢〇三箇月前金一圓四十五錢〇六箇月前金三圓〇一箇年前金六圓
〇時事新報社ヨリ直接ニ郵便ニテ遞送スルモノニ限リ右定價ノ外ニ一箇月十五錢ノ遞送料ヲ申受ク

時事新報廣告料前金

一行五號活字廿四字詰	一日限	二日以上六日迄	七日以上
一行ニ付	十二錢	十一錢	十錢五厘

月曜日幷に大祭祝日の翌日等他新聞紙の休刊日に限り時事新報配達の求めに應ず此場合には新報代價一箇月前金八錢にして地方に郵送する分は此外に貼用する郵便印紙の代價を申受く可し

時事新報

左の一篇の人種論は佛人グツスタヴ、ル、ボン氏の原稿にして其論旨我輩の意を得るもの少なからず依て飜譯して以て連日の社說に代ふ

人種論

今の史學の研究法が大に改良進步を爲し全く科學的のものとなりたるは實に兩三年來の事にして蓋し吾人の歷史上に於ける知見と理想との一新を致したるは獨り近代古物學の進步したるが爲めのみならず有形諸科學上の發見、與て大に力あるにて天然諸種の原因を以て其研究の料に供し歷史上の現象を以て星辰の運行、生物の化成と均しく一定不變の原則に順ふものとなすに至りたるも亦その發見の爲めに外ならずして古代の歷史家が以て天意もしくは偶然に歸したる處のものも今は全く是等の事には關係なく天然の原因の外何物にも歸す可らざる事となりたり蓋し史學上に於て斯る新法の始まりたる重なる原因は有形諸科學の進步したるが爲めにして萬物の進化上に過去の影響甚だ大なるの道理、ますます明白なりとすれば吾人は社會の現狀を察し兼て又未來の事を知らんとするには先づ其過去の有樣を研究せざる可らず即ち博物學者が動物を說明するに其祖先の形狀よりすると同じく歷史學者が吾々人類の理想と慣例との由て來る始を知らんとするには先づ其古代未開の習俗より吟味する事肝要なるべし古來の歷史は唯歷朝の更代及び戰爭の事のみを記するに止まりて其關係する所甚だ廣からざるに似たれ共新法に據て之を研究するときは其中自から無限の味わあるを發見す可し如何となれば近代の學者が歷史の研究に適用する所の方法は恰も博物家固有の研究法と同一樣にして人間社會は其發達の經歷に於て之を一個の有機體に喩ふ可ければなり社會胎孕學は動植物胎孕學に均しく其進化の法則に支配さるゝものにして社會胎孕學即ち文明開化の研究は今の開明社會の奇にして錯綜したる機關が吾々先人の曾て久しく生活したる野蠻の境界より發述したる其進步の次第を說き吾人の思想、感情、慣例、及び訓範が人間の初代に根源したる所以を明にするものあり今此研究法に依るときは古學者の所見の如く年老いたる兩親の肉を食する所の古代の人民と共老親に孝養を盡し其の墓上に哭する所の今の人民と婦女を以て一種族の共有に屬する下等動物として之を輕蔑したるものと交際社會の本幹として之を尊敬するものと不具の兒孫を拋棄して其の死を顧みざりしものと之を立派なる病院に入れて治療に心を盡すものとの間に一大溝渠を見ざるのみならず吾人は唯斯くも懸隔せる時代を通じて斯くも相違したる思想、慣例、及び訓範を密結する一連帶の存するを認るのみ今の文明は過去の文明より發達し來り猶は其萌芽の中に未來の文明を含有するは吾人の信じて疑はざる所にして思想、宗教、工藝及び技術等凡そ文明の本體を組織する各元素の進化は動物系統に屬する各種動物の進化に同じく一定不變の法則に順ふものと知る可し蓋し文明の成分たる各元素の發生と發達とに與て有力なる要素は生物を支配するものに同じく其數甚だ少なからず但し今日に至るまで其要素の如何に就き研究したるものなしと雖も二三のものゝ影響如何に至りては之を證明するに難からず而して其要素中にて最も重要なるものゝ一を人種となす之を詳言すれば即ち一體の人民に固有なる形體、精神及び德義上の風儀の集合せるもの是なり抑も人種なるものが歷史上に現はるゝに當りては則ち既に一種の特質を有したる時にして此時以後には變化を享くるゝと甚だ稀れなり左れば埃及上古の遺物に彫刻したる當時の民種の形容を見るに左まで今日に異なる所なくして今の人種の大別は當時と雖も通用したるを證するに足る可し左れば諸種の人種の區別は歷史前幾十萬年の間に成りたるものにて他の動物の種類に於るが如く淘汰及び遺傳の妙機を寓したる環象の變遷より起れる徐々たる變化の手段に依りて成りたるや疑ある可らず而して人民の歷史と其慣例、思想及び訓範の根原を知らんとするには先づ第一に其精神上より研究せざる可らず從來の學者の如く人種の區別を穿鑿するに之を形體上の特質に求むるは無益の勞とこそ云ふ可きのみ眞實人種の區別を精密になすものは夫れ唯心理學あるのみにして假令へ其外貌は相異なるも其精神の本體同一なる人民は同一の境遇に於て必ず同一の運命を有するものなりと云へり今此新法を以て今時の英國人と古代の羅馬人とを比較對照するに頗る其要領を得るものゝ如し此兩人民の間に精神上密接の關係あるは明白なる事實にして即ち獨立不羈の氣象を有する事、其慣例を尊崇する事、他國を征服し殖民地を所有するの技倆ある事等は雙方とも同一なれども其外貌に關する事柄に於て兩人民の間に絕えて相類似するものを見ざるなり　（未完）

雜報

沖繩近況

左に掲ぐるは鹿苑主人が沖繩縣下を巡廻して目擊耳聞せし處を記し本社に寄送したるものなり

余は今年八月中用を帶びて九州地方に赴きしが用事の果て歸途に就かんと行李を裝ひし折しも汽船の西に下る便を聞きたれば沖繩航行を思ひ立ち供人諸とも鹿兒嶋より海路七嶋洋を過ぎ大嶋を經て那覇港に達せり上陸して後彼地此地を遍歷したるに其開けたる樣實に想像の外に出で頗る余の意を滿足せしめ楫枕の薩摩潟に停まらざりしを喜びたり依て世の此地の近き事情を知らざる人の一覽に供へんと滯留の間見るまゝ聞くまゝをかきしるしゝが覺えず數葉を累ねたれば沖繩近況と題し貴社に投寄す

旅人宿　沖繩にて旅人宿と稱へ其體裁を備ふる者は唯那覇のみなり那覇の中にも間切宿（間切は內地の郡に比して小なる者）村宿など稱へて各間切、各村より來る所の地頭代、總耕作、掟、文子など稱へる胥吏を初として農民等の止宿所もあれど丹は狹隘不潔にして內地人は坐を占め箸を下し枕を安んずる能はず唯通堂と稱へる那覇港接近の土地に內地人の營業に係る旅舍三四戶ありそれは孰れも頗る體裁を備へたり何も床柱は南天にて疊は備後表、掛物は正眞の常信の三幅對にて床の置物は古銅の獅子額は三條內府にて違棚には蒔繪の料紙硯箱を備へるといふにはあらねど兎に角門を入れば玄關あり玄關を通れば奧に廣間あり二階もあり庭には樹石を布置し浴場廁等も清潔なり膳椀家具等は重に土地製の朱塗ものを用ひて雜ふるに內地製の物を以てす膳部も悉く內地風にて其調理も甚ぶ口に適へり殊に給仕の下女も手の甲に黥の痕あるも就中池畑、山川なと云ふは二階も廣く座敷も清潔なり池畑は先年陸軍大臣の旅館になりたりとて今尙巨大なる宿札を所持す此家の細君は曾て眉を剃り齒を染て居りしが大臣の一命により即時に鐵漿を剝し眉を蓄へたり是れ此琉球に於て婦人內地風を學びたる率先なりと亭主の誇顏に物語るを聞けり內地より來る旅客一箇年の總數は詳ならざれども昨年中那覇港に入りし汽船は郵船會社大坂商船會社及び沖繩廣運社の持船のみにても五十六艘あり一艘の乘客を五十人とするも二千九百八人なり其中には本土の人又は寄留人の一時他行して歸嶋せし者もあるべければ悉く目して旅客と爲す可らざれども此汽船入港の數に由て其槪略を推知すべし

甘蔗　沖繩の產物は砂糖を以て第一とするみとは夙に世人の知る所なり其內地に向て輸出の盛なるは大抵五六七の三箇月なれども本年は近來稀なる出來高の由にて今も尙ほ輸出絕えずと云ふ其產額は來年に至らざれば之を詳にすべからずと云へども爰に二十一年度の產額を記すべければ本年は近年稀なる出來高と云ふに照合して其梗槪を推知すべし二十一年度の產額は黑砂糖のみにて一千百五十四萬千五百三十四斤なり之を二十年度に比較すれば五百四十四萬六百九十斤の增額を見る本年は又昨年よりも過分の增額なれば總計一千七百萬斤には下らざるべしと云ふ斯く年々增加する所以を聞くに往時は此砂糖を製すべき原料即ち甘蔗の種植に制限を立て人民の隨意に栽培するを許さず其制限を立てし所以を聞くに元來此國の地質は米麥に適せざれば國人一般の食料は甘藷を以て最第一とす此甘藷は米麥の如く久しく貯藏に堪ふべき物質に非ざれば常に之を地上に缺はさるべからず甲地の物を食ひ盡すに亟として乙地既に細莖を延し乙地正に數畝を餘して甲地再び耘ぎらるといふ形狀なれば多量の畠地を此培養に供へ作ら尙足らざるの感を免れず然るに甘藷の種植に制限を

を立てずして人民
み是れ馳せ遂に甘
ら然るときは
らす一旦不幸にし
河內の島を救ふべ
飢餓を凌ぎ生命を
遠謀の末、審議
縣治以來內地との
具より輸好諸物に
に且つ時を期して
對して汝等最早甘
て甘蔗を蕃殖して
べし沖繩の富源は
て食料の缺乏に運
し汝等穀類を初め
せられて自由に且
當にして且懇切な
りしと見えて漸く
來砂糖製造の次第
造すれど二十一年
斤なり甚だ些少の
砂糖を製造するの
も時と力とを費く
することを好まず那
を屆ひ傳習を受け
共法を傳へなば本
し本年此試驗場に
し由あるが如何あ
にせず黑砂糖一斤
はあれども本年は
て五厘には下らざ
入の白砂糖も昨年
を聞きしもがかし
て一千九百九十七
（土音くんちやん
往昔の山北中山及
の頃、首里城近傍
王他魯毎を伐て全
然琉球の別號と在
宇見ゆ紹巴志が正
たる中山二大字の
して尙門頭に存せ
べし此本嶋の反別
久米の三嶋の反別
開墾地ありて矢張
りて之を砂糖に製
なり其製造所は全
四箇所は嶋尻に在
八箇所は國頭に在
嶋に在り

〇京都の近傍

知恩院の會議
凡そ一週間本山继
會議員は信徒總代
を聯合して三十八
近江、尾張、越中、
雲、越後の十五箇